

ハインリヒ・ベルの『あの頃オデッサで』（一九五〇年）について

ライナー・ケネツケ 著

竹岡健一 訳

■テキスト

あの頃オデッサでは、とても寒かった。ぼくたちは毎朝、がたがた音をたてる大きなトラックで、玉石舗装の道を通って飛行場へ行き、大きな灰色の鳥が飛来して、離陸場の上を旋回するのを、寒さに震えながら待った。だが、最初の二日間は、ぼくたちが搭乗する間際になって、飛行に適した天候にあらざとの命令が来た。黒海上空の霧が濃過ぎたり、雲が低過ぎたりしたのだ。そこで、ぼくたちは、再びがたがた音をたてる大きなトラックに乗り、玉石舗装の道を通って兵舎に戻った。

兵舎はとても大きく、不潔で、シラミがわいていた。ぼくたちは床にうずくまったり、汚いテーブルの上に寝ころんで、トランプで「十七と四」のゲームをしたり、歌をうたったり、塀を越える機会を窺ったりした。兵舎には待機中の兵隊が大勢いたが、だれも町へ行くことが許されなかった。最初の二日間、ぼくたちはこっそり抜け出そうと試みたが、無駄だった。引っ捕らえられたのだ。そして、ぼくたちは、罰として、大きな熱いコーヒーポットを引きずるようにして運び、パ

ハインリヒ・ベルの『あの頃オデッサで』（一九五〇年）について

ンの荷降ろしをせねばならなかった。そこには、いわゆる前線用に指定されたみごとな毛皮の外套を着て、一人の主計士官がおり、パンがちよろまかされないよう数えていた。そのため、あの頃、ぼくたちは、主計士官の計は会計の計ではなく、計算の計だと思ったものだ。オデッサの上では、あいかわらず空に霧がかかり、暗かった。そして、黒い不潔な兵舎の扉の前を、歩哨が振り子のように行き来した。

三日目に、ぼくたちはすっかり暗くなるまで待つて、さっと大きな門のそばへ行った。歩哨が止まるよう命じたとき、ぼくたちは、「ゼルチャー二分遣隊であります」と言った。すると、彼はぼくたちを通過させた。ぼくたちは男三人、つまりクルト、エーリヒ、そしてぼくだった。ぼくたちはとてもゆっくり歩いた。四時になったばかりだが、もうすっかり暗かった。ぼくたちは、大きな黒い不潔な扉から出ること以外、なにも望んでいなかった。ところが、外へ出た今、ぼくたちはむしろ再び中にいたい気持ちだった。ぼくたちは、八週間前軍隊に入ったばかりで、とても不安だった。だが、ぼくたちには分かっていた。つまり、もし再び中へ入ったなら、ぼくたちは絶対に出たいと思っただろうし、そのときには、それは不可能だっただろう。それに、まだ四時になったばかりで、ぼくたちは眠ることができなかった。シラミと歌声のため、そしてまた、翌朝にはよい飛行日和となることを、ぼくたちが恐れると同時に希望していたから。そうなれば、ぼくたちはクリミアへ空輸され、そこで死ぬことになるはずだった。ぼくたちは死にたくなかったし、クリミアへも行きたくなかった。だが、ぼくたちは、一日中この不潔な黒い兵舎にうずくまっていたくもなかった。そこでは、代用コーヒーのおいしがし、前線用に指定されたパンが、絶えず、絶えず荷降ろされた。そして、前線用に指定された外套を着た主計士官がその場において、パンがちよろまかされないようにいつも数えていた。

ぼくたちがなにを望んでいたのか、ぼくには分からない。ぼくたちは、郊外の暗い、でこぼこの路地へ、ゆっくりと入って行った。明かりの点いていない低い家々の間で、夜が、腐りかけた幾つかの木の杭で囲まれていた。その背後のどこか

に、荒地地があるようだった。故郷にあるような荒地地が。そこには道がしかれ、下水溝が建設され、測量棒がいじり回されるが、道はできないだろうと思われる。瓦礫、灰、ゴミがそこへ投げ捨てられ、再び草が生える。丈夫な野生の草が、夥しい雑草が。そして、「瓦礫積みおろし禁止」の立て札はもう見えない。あまりにも多くの瓦礫が、そこへぶちまけられたから……。

まだとても早かったので、ぼくたちはごくゆくりと歩いた。暗闇の中で、兵舎へ帰る兵隊たちがぼくたちに出くわし、また他の兵隊たちが兵舎からやってきて、ぼくたちを追い越した。ぼくたちは、パトロール隊に出会うのが恐くて、できれば引き返すのが一番いいと思った。だが、ぼくたちには、兵舎へ帰ればすっかり絶望するだろうということもわかってきた。だから、黒い不潔な兵舎の扉の中でただ絶望しているより、不安なほうが良かったです。兵舎では、コーヒーが、コーヒーが、絶えず引きずるようにして運ばれ、前線のためのパンが、前線のためのパンが、絶えず荷降ろされた。そして、ぼくたちはものすごく凍えているのに、主計士官は素晴らしい外套を着てうろつき回っていた。

ときおり、左か右に、一軒の家が現れ、そこから暗い黄色の光が漏れた。ぼくたちは、かん高く、よそよそしく、不安な金切り声を聞いた。やがて、暗闇の中に、とても明るい窓が現れ、そこはとても騒々しかった。「おお、メキシコの太陽よ」と歌う兵隊の声が聞こえた。

ぼくたちはドアを押し開き、中へ入った。中は暖かく、もうもうと煙がたちこめていた。そこには兵隊がいた。八人か十人。そばに女を侍らせている者もいた。彼らは飲んだり、歌ったりした。ぼくたちが入ったとき、一人がとても大声で笑った。ぼくたちは若くて小柄で、中隊全体の中でも一番小さかった。ぼくたちは、まだ真新しい軍服を着ていた。木質繊維で、ぼくたちの腕と脚はちくちくした。そして、ズボン下とシャツが、地肌の上でひどくむずむずし、セーターもまったく新しいもので、ちくちくした。

一番小柄なクルトが先頭に立って行き、テーブルを探した。彼は、皮革工場の見習いだった。彼は、職業上の秘密であるにもかかわらず、革がどこで調達されるかを、いつもぼくたちに話した。それどころか彼は、ごく厳しい職業上の秘密であるにもかかわらず、それでどれくらい儲かるのかまで、ぼくたちに話した。ぼくたちは、彼と並んで席についた。

カウンターの後ろに、女の人が現れた。親切そうな顔をした、太った黒髪の女の人だった。彼女は、ぼくたちになにを飲みたいのか聞いた。ぼくたちはまず、ワインはいくらかと尋ねた。というのも、オデッサではすべてのものがとても高価だと聞いていたからだ。

彼女は言った。「水差し一杯が五マルクよ。」そこで、ぼくたちは水差し三杯のワインを注文した。ぼくたちは、「十七と四」でお金を沢山すってしまい、残金を分け合っていた。つまり、それぞれが十マルク持っていた。兵隊たちの中には、食事をしている者もいた。彼らは、白パンの上でまだ湯気をたてている焼き肉と、ニンニクの臭いがするソーセージを食べていた。ぼくたちは、お腹が空いていることに今ようやく気がついた。女の人がワインを持ってきたとき、ぼくたちは料理の値段を尋ねた。彼女は、ソーセージは五マルク、パン付きの肉は八マルクよと言った。彼女は新鮮な豚肉よと言ったが、ぼくたちはソーセージを三つ注文した。兵隊たちの中には、女にキスしたり、なんの遠慮もなく女を腕に抱いたりしている者もいた。そのため、ぼくたちはどこに目をやればよいのかわからなかった。

ソーセージは熱くて脂っこく、ワインはとても酸っぱかった。ソーセージを食べ終わると、ぼくたちは、なにをすればよいのかわからなかった。ぼくたちには、もはやお互いに話すべきことがなかった。二週間の間、ぼくたちは列車の中に並んで横たわり、すべてを話し合ったのだ。クルトは皮革工場にいたし、エーリヒは農場の出身だし、ぼくは、ぼくは学校から出征したのだった。ぼくたちは相変わらず不安だったが、もう寒くはなかった。

女たちにキスをしていた兵隊たちは、今、剣帯を留め、女たちと外へ出て行った。三人の娘で、彼女らはまるい可愛ら

しい顔をしており、くすくす笑ったり、ぺちやくちゃ喋ったりしていたが、今、六人の兵隊とともに去った。六人だっただけだ。五人はたしかにいた。残ったのは、「おお、メキシコの太陽よ」を歌っていた、酔っぱらった兵隊たちだけだ。た。そのとき、カウンターのそばに立っている一人、つまり背の高いブロンドの上等兵が振り向き、またもぼくたちをあざ笑った。ぼくたちはテーブルのそばに、とても静かに大人しく、兵舎での講習のときのように、両手を膝の上において坐っていたのだと思う。そのとき、その上等兵が女主人になにか言い、女主人は、かなり大きなグラスに入った白い火酒をぼくたちに持ってきた。「ぼくたちは、今、彼の健康を祝して乾杯しなきゃならない」とエーリヒが言い、ぼくたちを膝で突いた。そこでぼくが、ぼくが、「上等兵殿」と叫んだ。彼のことを言っているのだと上等兵が気づくまで、とても長く。それから、エーリヒはまたぼくたちを膝で突き、ぼくたちは立ち上がり、「乾杯、上等兵殿」と一緒に叫んだ。他の兵隊たちはみな笑ったが、その上等兵は彼のグラスをかかげ、ぼくたちに向かって「乾杯、歩兵諸君」と叫んだ。火酒は強く、苦かったが、ぼくたちを暖めた。できればもう一杯飲みたかった。

ブロンドの上等兵がクルトを手招きした。クルトはそちらへ行き、上等兵と二言三言話し、ぼくたちも手招きした。上等兵は言った。お前らは狂っているんだ。なぜと言つて、お前らは無一文なのだから。お前らはなにか売りとばさなきゃ。そして彼は、お前らはどこから来て、どこへ行かねばならないのかと聞いた。ぼくたちは彼に言った。ぼくたちは兵舎で待機中で、クリミアへ飛ぶことになっているのだと。彼は真面目な顔をし、なにも言わなかった。そこで、ぼくは彼に聞いた。ぼくたちはなにを売りとばすことができるかと。彼は言った。なんでも。

ここではなんでも売りとばすことができるだろう。外套、帽子、またはズボン下、時計、万年筆も。

ぼくたちは、外套を売りとばしたくはなかった。ぼくたちは不安を持ちすぎていた。実際、それは禁止されていたし、また、ぼくたちはとても寒くもあつたのだ。あの頃オデッサでは。ぼくたちはポケットの中を全部探した。クルトは万年

筆を、ぼくは時計を、エーリヒは、兵舎での福引きで手に入れた、革の新品の財布を持っていた。上等兵は三つの品物を取り、いくらで引き取るかと、女主人に聞いた。すると、彼女はすべてのものをごくじっくり眺め、みな粗末なもので、二五〇マルク、時計だけなら一八〇マルクよと言った。

上等兵は、二五〇マルクとは少ないと言った。しかし、彼はまた、彼女はそれ以上は払わない、そしてもしお前らが明日クリミアへ飛ぶなら同じことだ、お前らはそれを受け取るべきだとも言った。

「おお、メキシコの太陽よ」を歌っていた兵隊たちのうち二人が、今、テーブルからこちらへ来て、上等兵の肩を叩いた。彼はぼくたちに軽く頭を下げ、彼らとともに出ていった。

女主人は、ぼくたちに全額を渡し、そして今、ぼくは各自に二人前のパンつき豚肉と、大きいサイズの火酒を注文した。そして、ぼくたちはもう一度各自が二人前の豚肉を食べ、もう一度火酒を一杯飲んだ。肉は新鮮で脂っこく、熱くて、甘いくらいだった。そしてパンには、すっかり脂が滲み込んでいた。そして、ぼくたちは、その後もう一度火酒を飲んだ。それから、女主人は、豚肉はもうなく、あとはソーセイジだけよと言った。そして、ぼくたちはそれぞれソーセイジを食べ、加えてビールを、濃い黒ビールを出してもらった。そして、ぼくたちはもう一杯火酒を飲み、そしてケーキを、挽いた胡桃で焼いた、平たい乾いたケーキを持ってこさせた。それから、ぼくたちはもっと多くの火酒を飲み、しかもまったく酔わなかった。ぼくたちは暖かくて気持ちよくなり、そして、ズボン下とセーターの木質繊維に刺が沢山あることも、もはや気にならなかった。そして、ぼくたちはみなで、「おお、メキシコの太陽よ」を歌った。

お金は六時になくなったが、ぼくたちは相変わらず酔っていないかった。もはや売りどばすものを持っていないかったので、ぼくたちは兵舎へ帰った。暗いのでこの通りには、今、まったく明かりが点いていなかった。監視所を通ったとき、歩哨が、ぼくたちは詰め所へ行かねばならないと言った。詰め所は暑く、乾燥しており、不潔で、タバコの臭いがした。下

士官がぼくたちをどなりつけ、どういふ結果になるかわかっているだろうと言った。だが、その夜、ぼくたちはぐっすり眠り、翌朝、がたがた音をたてる大きなトラックで、玉石舗装の道を通って、飛行場へ行った。オデッサは寒く、天気はみごとに晴れた。そして、ぼくたちはとうとう飛行機に乗った。飛行機が高く上昇したとき、ぼくたちは突然知った。ぼくたちがもう二度と、二度と戻ってこないだろうということ。・・・。

(出典 『ハインリヒ・ベル物語集 第一巻』キーペンホイアー・ヴィッツチュ出版社〔ケルン〕一九八一年。)

■ 解 釈

一、略伝と著作に関する指摘

ハインリヒ・ベルは、一九一七年十二月二日、家具職人の息子としてケルンに生まれた。彼は、小市民的・カトリック的境遇の中で成長したが、そのことは、他の要因とともに、彼の後の仕事に決定的影響を及ぼすこととなった。一九三七年、アビトゥーア（大学入学資格試験）終了後、彼は、書店員見習いを始めたが、間もなく中断した。帝国勤労奉仕の後で、大学での学業を始められるようにするためである。だが、一学期目の終了後早くも、ベルは国防軍に召集され、第二次世界大戦中、幾つかの前線へ、とりわけクリミアへ投入された。彼は、幾度も負傷した。一九四二年、ベルは、幼なじみのアンネマリー・チェヒと結婚した。彼らの最初の子（クリストフ、一九四五年誕生）は、数カ月後亡くなった。一九四七年から一九五〇年の間に、三人の息子、つまりライムント、ルネ、およびヴィンセントが生まれた。

一九四五年九月に戦争捕虜から解放された後、ハインリヒ・ベルは、学業を再開したが、同時に様々な活動を行わなければならなかった。教師として働く妻と共同で、家族のための生計をまかなうためである。彼の文学上の最初の仕事が成

立したのは、この時期であった。

丁度失業したベルは、一九五一年五月、物語『黒羊』に対して、四七年グループ賞（および賞金一〇〇〇マルク）を与えられ、今や、文学的仕事にすっかり身を捧げることになった。幾つかの小説が矢継ぎ早に出版された。つまり『アダムよ、お前はどこにいた？』（一九五一年）、『そして一言も言わなかった』（一九五三年）、『保護者なき家』（一九五四年）など。それらと並んで、ハインリヒ・ベルは、物語を出版した。すなわち『汽車は遅れなかった』（一九四九年）、『旅人よ、スパへ……』およびその他の物語（一九五〇年）——『あの頃オデッサでもこの作品集に収められている——、『若き日のパン』（一九五五年）、短編でも風刺でもある『クリスマスの時期だけでなく』（一九五二年）と『ムルケ博士の沈黙収集』（一九五八年）など。特別な立場をとっているのは、ベルの『アイルランドの日記』（一九五七年）である。その中では、彼は、自己のアイルランド滞在の休暇の印象を、ユーモア溢れる小さなエピソードの形で書き留めた。

六〇年代には、小説『九時半の玉突き』（一九六一年）と『道化の意見』（一九六三年）が成立した。それらは、西ドイツで最も有名で、おそらく最も重要な戦後作家としてのベルの名声を築いた。この作家は、アデナウアー時代の連邦共和国の政治的・道徳的状况、およびカトリック教会と対決し、そのさい、エッセイストとしても有名になった。

『フランクフルト講義』（一九六六年）において、ベルは、彼の文学的綱領を紹介した。その中で、彼は、重要な社会的政治的機能を文学に与えた。すなわち、作家というものは、厄介な警告者でなければならず、徹底的に人道的な立場から、アウトサイダーと彼らの利益に取り組まねばならないのである。したがって、例えば『部隊からの離脱』（一九六四年）と『ある勤務旅行の終わり』（一九六六年）において、軍国主義ないし連邦国防軍に対する彼の拒否の態度が明確になっている。

ベルは、彼のそれまでの散文の多くのモチーフを、小説『淑女のいる群像』（一九七一年）において取り上げた。それゆ

え、その小説は彼の主著と呼ばれることもある。それと並んで、七〇年代には、大衆向き新聞雑誌が人間を軽蔑する策略との厳しい対決である『カタリーナ・ブルームの失われた名誉』（一九七四年）、およびベルが繰り返し発言を求めた時事問題についての多数の論文が成立した。例えば、彼は、ヴィリー・ブラントの東方政策を支持し、逆に、社会自由大連立政権のいわゆる過激派対策条例に対しては、はっきりと距離を置いた。バーダー・マインホーフグループのアナーキストたちとの公平な交渉に対する彼の支持（『ウルリーケ・マインホーフが欲するのは恩赦かそれとも自由通行権か？』（一九七二年、『シュピーゲル』所収）もまたセンセーショナルなものだった。それは、彼を、警察による捜索行為と、テロリスト世界のシンパという嫌疑とに晒した。この詩人は、連邦共和国における軍備増強決議と中距離核ミサイル配備に反対する大衆デモ（一九八一年）にも参加した。

すでに早い時期に、ベルは、ナチス・ドイツの下で特に被害を受けた国々の知識人との対話のために努力した。彼は幾度もソ連へ旅行しており、追放されたロシアの体制批判者で作家のアレクサンドル・ソルジェニーツインとレフ・コペレフは、一時彼の家に受け入れられた。

ベルの最後の小説は『河の風景に立つ女たち』（一九八五年）である。死後、一九九二年に、一九四一年から五一年にかけて執筆された小説『天使は沈黙した』が刊行された。この作家は、一九八五年七月一六日、ボルンハイム・メルテンで死去した。

多数の賞が、ハインリヒ・ベルの活動を正当に評価した。なかでも際立っているのは、一九七二年のノーベル文学賞と一九六七年に彼に認められたゲオルク・ビューヒナー賞である。

二、形態的特徴

二、一、短編の構造

短編『あの頃オデッサで』の直線的な筋の構造は、筋の場所によって前もって与えられた枠にはめられている。そして、その外面的な支えと考えられるのが飛行機であり、それは不気味な運命の神々のごとき「大きな灰色の鳥」として、若い新兵たちのその後の人生に影を投げかけるのである。

物語の始めでは、飛行機とオデッサの飛行場が語られる。飛行場は厚い霧の中にあり、それゆえ、若い兵隊たちのクリミアへの次の輸送は、二日間遅れる。第二節のテーマは兵舎であり、例の三人は、恐るべき前線投入の前に、待機期間をそこで過ごさねばならないのである。

それに続く、より長い節でもって、「三日目に」、内部の筋が始まる。つまり、若者たちは、規則に背いて、本来の目的を知ることもないままに、「大きく、不潔で、シラミがわいていた」兵舎を出る。オデッサの暗い郊外を通る彼らの道は、黄泉の国を行く行進のような印象を与える。それはまるで、彼らが自らの心の風景に沿って歩いているかのようにである。つまり、「夜が、腐りかけた幾つかの木の杭で囲まれていた。その背後のどこかに、荒れ地があるようだった。」この章は、三人の若者が明かりが煌々と灯った飲み屋に行くわすことで終わる。奇妙なことに、物語の中でなんの名称も与えられていないこの場所が、この後、さらなる出来事を規定することになる。

この短編の中間部全体は、この兵隊相手の飲み屋で演じられる。それによって、この飲み屋は、構造と筋において、ならびにこの短編の解釈にとって、中心的な立場を占める。加えて示されねばならないことは、三人の若者がこの飲み屋に滞在することが、彼らの人生における転換を象徴していることである。つまり、なにか基本的な事柄が変化し、そのことが、彼らに、その後の出来事を変化した立場から体験させることになるのである。

最後の章では、それまでにあげられたすべての場所が、正反対の順序で、もう一度短く登場する。つまり、飲み屋から暗い町を通って兵舎へ帰る道が描かれる。そしてその翌日が、飛行場へ行く最後となり、人々は飛行準備の整った飛行機に乗り込み、それで空へ飛ぶ。その空は、短編の始めの霧とは反対に、今は「みごとに（！）晴れ」ているのである。

戦争中の出来事という関連の中に、筋を十分歴史的に配列することは、語り手は断念した。しかしながら、この短編の背景は、多くの損失を出したペレコプの地峡での戦いだと仮定されうる。この戦いは、軍集団ジュートから孤立したドイツルーマニアの軍隊が、一九四三年十月末から十一月初めにかけて、優勢なソ連の部隊に対して行ったものである。この短編の時間的枠は、——題名の漠然とした「あの頃」によってすでに示されているように——おおよそしか決定されない。三人の新兵のオデッサ滞在は、全体でおそらく三日間続いている。「最初の二日間」は、クリミアへの投入のための出発は中止される。だが、夜の遠出の翌朝、彼らは飛行機に乗り込むのである。目立っているのは、物語の中間部の時間的広がりである。彼らが兵舎を出たとき、「四時になったばかりだが、もうすっかり暗かった。」そして、六時には、彼らはもう部隊に戻り始めている。飲み屋の訪問が全部で二度二時間にしかならないということは、多くの出来事（会話、最後のこまごました全財産を売ること、数多くの注文、飲食、歌）からして、驚くべきことと思われるに違いない。この広い拡張が、もう一度、この節の占める中心的地位を強調している。すべての瞬間が集中的に味わい尽くされるがゆえに、この体験は、物語り上、それに応じて凝縮され、それによって特別に際立たされねばならないのである。

オデッサにおける時間的、および空間的な円は、最後に「とうとう」閉じられる。しかし、それにもかかわらず、開かれた結末が残る。というのも、その先の出来事は、——三つの点（三人の兵隊の代わりだろうか？）暗示しているように——漠然としたものの中で雲散霧消するからである（リーダーは、欧文では三点なのに対し、和文では通常六点である。しかし、翻訳では、ここでの解釈の主旨を生かすため、物語の末尾のみ、通常リーダーに代えて、三つの中黒を用いて

いる（訳者注）。

二、二、語りの態度と言葉

ベルのこの短編は、「私」の語る語りの形式で書かれている。そのさい、ここではそれ以上考察されないが、局外の語り手が語る語りの態度と作中人物に反映する語りの態度、および中立的な語りの態度が混ざっている。

「あの頃オデッサでは、とても寒かった。」このスタイルは、くつろいだとさえ呼ばれるべき雑談調を思い出させる。つまり、そこでは、誰かが、「あの頃」について、すなわち彼がすでにある程度距離をとった、彼のずっと後ろにある時期について語っているのである。だが、物語の大部分は、単数の「私」の視点からではなく、「ぼくたち」という複数形で報告される。「私」の語り手が個人として自ら関与することは、ごく稀である。彼は、「ぼくたちがなにを望んでいたのか、ぼくには分からない」という言葉でもって、郊外を通る夜の放浪のエピソードを導入する。後には、彼は、自分が生徒でありながら召集されたことに言及する。そして最終的には、私たちはさらに、彼が飲み屋で「売りとば」される時計を持つていることを聞き知る。しかし、まったく文字どおりの発話の調子で、「私」の語り手が、重ねられた人称代名詞で二度自分を持ち出そうとも（「そこで、ぼくが、ぼくが、へ上等兵殿と叫んだ。」「ぼくは、ぼくは学校から出征したのだった。」）、それによって彼が小さな共同体から際立つことはなく、強調されるのは、語りの行為における彼の情緒的関与である。つまり、ここで報告されねばならないのは、共通の戦争体験であり、すでに推測されたとく、戦友意識である。集団としての体験が、「私」の語り手の一回的・主観的な経験より優先するのである。そのことに適しているのが、まったくもったいぶらない言葉である。それどころか、それは、例えば「売りとばす」という言葉が立て続けに四回用いられるとき、戦友の間で使われる隠語に近づく。

物語の終わりでの語りの形式は、ある種の誤解の中にあるように思われる。最後の言葉（二度と戻ってはこないだろうということ。・・・）は、——三つの点によってより強調されて——クリミアへの飛行が死への飛行であろうことを暗示している。それゆえ、オデッサでの出来事を報告することができるために、戦闘を生き残ったに違いない「私」の語り手が機能することは、ここでは適当ではない。ここから明らかになるのは、最後の文には、全体として、もう一つ別な意味合いがあるということである。それについては、この解釈の最後に、なお検討されるべきであろう。

言葉の形態が目立った特徴の一つは、反復の頻繁な利用である。そのさい、すでに言及したこの短編の枠構造が、最後の節で最初の文がほとんど文字通り取りあげられる（「オデッサは寒く」——ただし、ここではより大きな関連の中に包まれてではあるが——）ことによって強調されている。最初に述べられたオデッサの寒さについては、結末でもなるほどなにも変わっていない。だが、それは、その間の出来事ゆえに、もう一つ別な、むしろ付随的な意義を得たのである。

この短編における語の反復の多用は、それだけでなく大変濃密な雰囲気を一層強める。そのさい、しばしば、付加語の二重化という様式手段が、同時に利用される。たとえば、「黒い不潔な兵舎の塀」が、いっぺんに何度も話題にのぼる。三人が晒されていると感じる、圧迫する狭さを描くためである。後で「小柄」と呼ばれるこの三人の新兵にとって、「大きな」と同時に不気味であるのは、「がたがた音をたてる大きなトラック」と「大きな灰色の鳥」のみではない。それどころか彼らが罰として運ばねばならない「熱いコーヒーポット」もそうである。「暗い」という形容詞もまた、しばしば用いられる。霧のかかった空に対して、「郊外の暗い、でこぼこの路地」に対して、さらには、家々から「暗い黄色」で彼らに向かって照る光に対して。

兵舎での耐え難い状況は、「絶えず」という副詞によって強調される。（「前線用に指定されたパンが、絶えず、絶えず荷降ろされた。」）そのさい、兵隊たちには、このパンが彼ら自身よりも数日か数時間先に「前線に指定された」に過ぎな

いこと、つまりそれが彼らに先立つに過ぎないことは、明らかである。主計士官の「みごとな毛皮の外套」については事情は違う。それは、同様に「いわゆる前線用に指定された」ものであるが、その着用者と同様、決して前線を知ることはないであろう。

全体としては、言葉は、ありうる感覚的印象をすべて指摘しているという特徴を持っている。(例えば、視覚では明るい窓、親切そうな顔、聴覚では歌、騒々しさ、くすくす笑う女たち、嗅覚ではニンニク、味覚では酸っぱいワイン、豚肉、触覚ではむずむずすること。)このことが、もっともはっきりしているのは、若者たちが絶えず「もう一度」なにかを注文するエピソードにおいてである。つまり、「各自に二人前のパンつき豚肉」、「もう一度各自が二人前の豚肉」、「もう一度火酒(これは二度繰り返される)」、そして「もっと多くの火酒」など。この多くの、しばしば接続詞「そして」によって多辞的に生ぜしめられる反復により、感覚的印象に耽っているという印象が、すなわちほとんど吐き気と紙一重の暴飲暴食の印象が生まれる。と同時に、それによって、すでに言及したような、語られた事柄の膨張も引き起こされるのである。

感覚的なものの強調をさらに強めるために、語り手は、頭韻(語頭や句頭に同じ音を反復する文彩Ⅱ訳者注)という手段を用いている。つまり、肉は「新鮮で脂っこく(Frisch und fett)」、ビールは「濃い黒(dick und dunkel)」である。三人の新兵は、「ワイン(Wein)」と「ソーセージ(Wurst)」を注文し、終わろうとしない食事のさい、彼らは「暖かくて気持ちよく(warm und wohl)」なる。ここでは、柔らかい「ヴ(W)」の音が、軍隊的で厳格な兵舎の調子——三人は数時間そこから逃れるのだが——と著しい対照をなしている。軍隊的な言葉の短縮の不合理さと厳格さは、すでに短編の最初の節で、ほとんどパロディーのようなやり方で紹介されている。つまり、司令部から「飛行に適した天候にあらすとの命令が来た。」

余論、対立としての兵舎と酒場

短編『あの頃オデッサで』は、戦争中の二つの経験領域の対立を糧としている。かつて、すべての兵隊は、それらに（間近に迫った将来における陰鬱な脅威として、ここで一つの役割を演じている前線投入と並んで）晒された。すなわち、兵舎と酒場である。

そのさい、兵舎は、非人間的な場所が持つすべての特徴を示しており、若い兵隊たちにとって地獄となる。つまり、寒く、男たちには明らかに食べる物も十分ではない。それは、パンの荷降ろしของさいの主計士官の邪推とその後の飲み屋における暴食の酒宴を説明するものである。兵舎は「不潔で」「黒」く、「シラミがわいて」いる。兵舎は、新兵たちにとって牢獄となる。彼らは、「前線用に指定された外套を着た」腐敗した上司によって、その中に閉じ込められ、辛い仕事をしよう仕向けられるのである。彼らには、自らの運命を疑う余地は少しもない。つまり、彼らは、自分たちが「死ぬことになる」クリミアへ飛ばされるのを待っているのである。

彼らの心の状態は、矛盾している。「翌朝にはよい飛行日和となることを、ぼくたちが恐れると同時に希望していたから。」極端な単調さと、それとは正反対の内面的緊張が、彼らに処罰に対する不安を一瞬忘れさせ、策略の助けにより、はつきりした目的も持たぬまま兵舎の外へ逃れさせる。

彼らの密かな、無意識の憧れの目標は、例の飲み屋である。それは、「暗闇の中に」、「とても明るい窓」によって予告され、光と暖かさが、彼らに向かって響きわたる歌を、すなわち「メキシコの太陽」を約束する。楽しい歌が、留まるよう誘う。これに対し、兵舎での「歌声」は、彼らからただ眠りを奪っただけだった。心地よい暖かさが、新兵たちに放たれ、ここでは、ワイン、女、歌が見出されうる。

それにもかかわらず、この場所は、なにか胡散臭いものを持っており、悪の巣窟と呼ばれうる。六人の兵隊と外へ出て

行く三人の「女たち」ないしは娼婦のみならず、三人の若者によってとられる食事——それは度外れと言ってよいほどの宴会へと発展する——も、その証拠である。この飲み屋では、肉欲と暴飲暴食が、つまりカトリックの理解における大罪が行われる。それでもなお、この場所は、とりわけなにか慰めになるもの、くつろがせるものをもっている。そしてそれを、あの三人は丁度今は非でも必要としている。内面的・外面的な寒さから、不確かな、恐らくは死をもたらす未来に對する彼らの絶望と不安から、ほんの数瞬間逃れるために。彼らの暴飲暴食と、それはそれで無駄な飲酒（「ぼくたちは相変わらず酔っていなかった。〔……〕、ぼくたちは兵舎へ帰った。」）は、彼らの死の恐怖を排除する試みであるが、戦争という状況下において、このような飲み屋以外にそれがもつとまう行く場所があるだろうか？ここは、兵舎よりも「不潔」でなくはない。しかし、彼らはそのことにまったく気づかない。彼らは兵舎では凍え、空腹だった。それに対し、この飲み屋では、彼らとはかく処刑前の最後の食事^{に似たもの}をとることができる。そしてそのために、彼らは、まだ残っているすべてのものを、つまり彼らの給料と幾つかの物を犠牲にするのである。兵舎では、彼らがかかわっていたのはもっぱら死を考へること、および——前もって指摘するなら——死に引き渡されるために、できれば早く、または幾らか遅くなっても、むしろ兵舎の生活の単調さから脱することのみであった。それに対し、今、二時間足らずの間、存在するのは、生きるというただ一つの願望なのである。

兵舎と飲み屋という対立でもって、ベルは、バロツク的なモチーフを取りあげている。すなわち、^{ヴァーニタス}空の思想である。ほとんど手でつかめるほど近くにある死を前にして、三人の新兵は、まったく具体的な事物ないしは感覺性の中で、一瞬間生をつかみ、最後の楽しみを得ようとする。その道は、この広く捕らえられた物質的^{感覺性}から、兵舎へと戻って行く。つまり、「空」——それはここでは、暗示的でぞつとするような方法で、死を象徴しているのだが——への飛行が始められねばならぬ場所へである。

三、登場人物

「ぼくたちは男三人、つまりクルト、エーリヒ、そしてぼくだった。」すでに語りの態度を記述したさい明らかになったごとく、この「私」の語り手、つまり丁度学校を出たばかりの若い新兵は、自分を筋の担い手として特に強調しない。彼は、第一に、自分をこの小グループの一部とみなしている。つまり、彼にとつて重要なのは、彼らのその都度の個人的運命ではなく、彼らの共同体の体験なのである。新兵として恐るべきオデッサ行きを命じられたという状況と並んで、彼らを結びつけているのは、その年齢と大きさである。「ぼくたちは若くて小柄で、中隊全体の中でも一番小さかった。」このことが、彼らを結びつけている。例えば、彼らが飲み屋に現れたとき、経験ある年長の兵隊たちの間に哄笑を引き起こす。というのも、彼らの——とりわけ「真新しい」軍服を着ての——登場全体が、彼らがまだまだ子供であることを証明しているからである。

すでに話題になった主計士官のわずかな性格づけを除けば、短編のこの章まで、登場人物たちは、まだまったく幻のようなままである。飲み屋の内部の記述の後にようやく、語り手は、自己とその二人の戦友に立ち入る機会を、少しではあるが見出す。「一番小柄なクルト」、つまり「皮革工場の見習い」は、彼が「ごく厳しい職業上の秘密」を所有していると称することによって、戦友たちに感銘を与えようとする。この秘密と称するものによって、クルトは、彼の戦友たちを、結託したとも言える共同体に取り入れる。そして、その中で、彼は——その小ささにもかかわらず、あるいはまさにそれゆえに——特権的地位を占めようと試みるのである。例えば、飲み屋で三人のために適当なテーブルを探そうと先頭に立つて行くのも、彼である。よりによって見習いが、その職業教育がなされる工場の慎重に守られた職業上の秘密を知るなどということは、ほとんどあり得ないと思われる。にもかかわらず、他の者たちは、クルトの無邪気な自慢を受け入れているように思われる。それは純真さかもしれないし、また思いやりかもしれない。彼らがクルトを傷つけるこ

とを欲しておらず、彼らにとっては大変重要なこの小さな共同体を、クルトの物語へ正当な疑いを差し挟むことによって壊すことを欲してはいないという限りにおいて。

「農場の」出身であるエーリヒについて、および語り手自身については、読者はそれ以上詳しいことを聞かない。列車での長い旅の途上、彼らは「すべてを話し」合った。そして、彼ら全員にとって、今重要なのは、振り返って過去を一瞥することよりも、現在である。きわめて疑わしい未来を前にして、是が非でも瞬間をなおい尽くすことが肝要なのである。そして、語り手は、彼がこの三人の若者の個人的運命にあまり詳しく立ち入らず、彼らのグループとしての行動をかなり詳細に観察するとき、このような内面の状態を精確に反映しているのである。

兵舎にいる墮落した主計士官と対照的な人物として、この飲み屋には上等兵がいる。彼はなるほど最初彼らを「あざ笑う」が、しかし、その後、女主人を通じて彼らに火酒を運ばせることによって、寛大な、後援者ぶった振る舞いをする。経験豊かな兵隊として、もちろん、彼は自分が新兵たちより勝っていると感じているが、しかしまた彼らに関心を持つ。例えば、彼は、彼らがクリミアで戦わねばならないと聞いたとき、以前の陽気さとは違って、「真面目な顔」をする。彼には、この三人の若者が数日後にはきつと死ぬだろうことが分かっているのである。彼は、「なにかを売りとばす」ように彼らに真剣に勧め、「なにを売りとばすことができるか」という問いに対して、彼らに、「なんでも」という多義的な助言をする。この情報が多義的なのは、それが飲み屋において物を売る可能性にも、目前に迫ったクリミアへの投入を生き抜くという彼らの見込みにも関連づけられうるからである。「お前らがあすクリミアへ飛ぶなら同じこと」なのだから、女主人の二五〇マルクを受け入れるよう三人の新兵に忠告するとき、上等兵はいくらかより無遠慮になる。このようにして、彼は、引き続き起こる大食と痛飲の放縦——それを三人は、もはやおそらくは死を免れぬ者として享受するのだが——へのきっかけを与えるのである。

短編『あの頃オデッサで』の登場人物の中には、なんらかの形で突出した人物はいない。三人の新兵の場合にも、上等兵の場合にも、問題となっているのは戦争中いたるところで、どの前線でも見出されうるような、平均的な人間である。それによって、彼らは、短編というジャンルに普通でなくはない仕方、典型へと還元されたのである。このことは、主な登場人物にのみならず、副登場人物にも当てはまる。つまり、「前線用に指定された外套を着」て「その場にいて」、「いつも数えていた」主計士官たちは、見分けがつかない。また、「親切なそう顔をした、太った黒髪の女の人」である女主人も、すでにほとんどなにか型にはまったものを持っているのである。語り手のベルに関心があるのは、一回的な個人の運命ではなく、典型的なもの、すなわち、すべての前線兵士が体験しえたが、それにもかかわらず個々の事例では転機となりえたものなのである。

四、短編の意味内容

『あの頃オデッサで』という題名は、語りの調子においても内容的にも、最初から、語られた事柄にある種のさりげなさを与える。その結果、この短編のより深い意味は、二度目に覗いたときようやく把握される。このジャンルに典型的な、物語における転換が明確に規定されえないとしても、『あの頃オデッサで』の経過は、完全にある種のイニシエーションであり、と同時に本来の意味で転機として理解されうる。つまり、三人の若い兵隊は、彼らを変え、まったく軍人らしくない意味で彼らを男にさせる体験をするのである。そのさい、彼らの体験は、そもそも華々しいものではなく、題名がすでに暗示しているように、クライマックスなしに、むしろついでに生じる。

物語の中心的モチーフは、すでに最初の文で言及される物理的寒さと並んで、内面的恐怖、常にいたるところに存在する不安である。すなわち、上官に対する不安、クリミアの血なまぐさい前線への投入に対する不安、死に対する不安であ

る。だが、「黒い不潔な兵舎の塀の中でただ絶望しているより、不安なほうがましなのだ。」それゆえ、彼らの不安は、彼らが厳しい命令に反して兵舎を去ることを妨げはしないものの、彼らが町へ行く途中にも、彼らの頭から離れないのである。

そのさい、彼らが不安に対置したのは、一人ではなく、三人だという気持ちである。この真の仲間意識の体験——それはなるほど必要から生じたものだが、それでもなお本物である——は、彼らが不安を耐えることを幾らか容易にする。純真さと素朴さという点で、彼らは、耐え難い兵舎滞在と戦争の恐怖に対する恐れに晒されると同様に、年上の戦友の哄笑にも晒される。だが、彼らは、それらすべてを耐え抜く。それは、彼らがそれらを一緒に耐え、しかもしっかりと結束しているからである。

そのさい確認されうるのは、ベルが取り上げているのが、英雄的な男の友情——それは楽しいにつけ苦しいにつけ戦争を耐え抜くことを助けたものであるが——という、よく知られた、疑わしいイメージでは決してないということである。この三人の新兵は、まだ前線経験がなく、これまでのところ、後方兵たん基地での、戦争の平凡な日常に晒されたに過ぎない。彼らに共通しているのは、一人前になる機会を前もって与えられないままに、彼らが市民生活から、すなわち見習い、若い農民、生徒としての慣れた環境から容赦なく引き離されたということである。（ごく広い意味での彼らの経験不足は、次の点でも明るみになっている。つまり、彼らは、飲み屋で、年上の兵隊たちが後で一緒に出て行く彼らの娼婦にキスをしたとき、気まずい思いをして目をそらすのである。）三人が一緒にいるのは、平和な状態でも戦争の状態でも、彼らが大人の世界に属していないのに、それにもかかわらず、示されていない、そしてまた示されえない「意味」のために死ぬるだけ歳をとっていなければならぬからである。

彼らが戦歴を持たないというまさにそのことから示されるのは、彼らの戦友意識が、武器の音を軋ませる響きがまっ

たくななくてもやっていけるといふことである。それゆえ、彼らの小さい同盟は、自己犠牲に満ちた友情とはなんの関係もない。例の疑わしい戦争報告では、戦闘による連帯と前線経験が、証明の必須の前提として、男としての成熟の触媒として美化される。それとは反対に、ここでは、戦争はその「黒い不潔な」平凡さの中で示されるのである。

この三人はまったく軍人らしくないが、それにもかかわらず僚友関係を結ぶ術を心得ているということが、この短編の本来の内容である。そのさい、彼らの僚友意識は、彼らの不安よりも大きい。彼らは、「十七と四」のゲームで残った現金と同じように、その不安を分け合うのである。その金も使ったとき、彼らは、女主人に「売りとばす」ために、彼らの貴重品をまとめる。しかも、それぞれの品物がまったく異なる値段になるにもかかわらず、共同の売上金、つまり二五〇マルクが皆に均等に使われるということは、彼らにとって自明なことである。この瞬間には、ぼくのものゝ君のものゝという区別はなく、ただ「ぼくたち」しかない。それゆえ、当然の帰結として、それがこの短編の語りの形式の決定的特徴となるのである。

象徴的な意味を持つのは、三人が分かれを告げる対象である。つまり、時計、財布、万年筆は、すでにまったく実用的な考慮から、日常生活に属している。それどころか、それらは、生涯の時間、物質的前提、ならびに——まさに戦争において重要な手紙と日記のことを考えれば——コミュニケーションないしは自己確認の可能性を代表しているのである。新兵たちがここで、これらほとんど生存に必須の物を売ることは、彼らが余計な荷物から、明日を思うことへの断ちがたい思いから、そしてまたそれまで様々な形で兵舎での彼らの生活を規定していた不安から——意識していようと無意識であろうと——自己を解放することを示している。彼らは、飲み屋に入ったとき彼らに不快感を引き起こした「ズボン下とセーターの木質繊維に刺が沢山あること」をものはや感じない。そうではなく、今彼らは「温かくて気持ちよく」なる。——オデッサの寒さも、制服がむずむずすることも、彼らが皆と一緒に「メキシコの太陽」の歌を歌うことを妨げないのである。

短編『あの頃オデッサで』では、イニシエーションを描くこと、つまり別の世界との接触とそこへの手ほどきを描くことが問題なのだともって主張されたとすれば、その理由は、三人の若者が、彼らの不安を克服するからである。詰め所で大声で叱る下士官が、漠然と脅かしつつ彼らの夜の遠出の「結果」を予告するとき、それは彼らにほとんど効き目を及ぼさない。というのも、「だが（！）、その夜、ぼくたちはぐっすり眠り「……」」と言われていたのである。翌朝、空はもはや霧深くどんよりしてはおらず、「みごとに晴れ」ている。そのことは、今や「とうとう」自分たちのさらなる運命を迎える、三人の兵隊の内面の状態を暗示している。

この短編の最後の文は、まったく多義的に解釈されうる。そのさい、その根拠は、三つの点によって、目に見える形で示されている。例えば、表面的にはもちろんこう考えられる。つまり、三人の若い兵隊は、「もう二度と」オデッサへ——兵舎の寒さの中へも飲み屋の暖かさの中へも——戻らないだろうと。とりわけしかし、彼らが以前の未経験と不安の状態へ再度逆戻りすることはあるまい。彼らはそれを、「あの頃オデッサで」、この一夜で永久に克服したのだから。最後に、もう一つ超越的な意味のレベルが認識されうる。すなわち、その後の戦争の出来事を生きて克服したに違いない「私」の語り手を除けば、僚友たちがその後いかなる状態にあるのかが、また、「ぼくたちがもう二度と」という言葉がクルトまたはエーリヒがクリミアでの戦いで戦死し、その死が彼らの小さな共同体を引き裂くであろうことと関係があるのかが、不明確なままなのである。

付記

この翻訳の底本は、Rainer Könecke: Interpretationshilfen Deutsche Kurzgeschichten 1945-1968. 12 Texte und Interpretationen. Sekundarstufe II. Stuttgart/ Dresden: Klett 1994, S. 63-79, Heinrich Böll: Damals in Odessa (1950)である。原文においてイタリック体で強調されている

箇所は、訳文ではゴシック体で表記した。なお、『あの頃オデッサで』には既訳（青木順三編訳『ハインリヒ・ベル短篇集』（岩波書店）一九八八年、三二～四〇頁）があり、適宜参考にさせて頂いた。また、短編の訳文に関しては、いわゆるこなれた訳よりも、解釈の部における文体的特徴についての指摘が、日本語でも理解できるように工夫することを優先した。加えて、解釈で使用された「語りの態度」に関する概念の理解については、拙訳「ヴォルフガング・ボルヒェルトの『パン』（一九四六年）について」（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第五二号〔平成十二年〕、四一～六〇頁）の「付記」（五九～六〇頁）を参照されたい。